

JICA エッセイコンテストを生徒の学びのエンジンに

～学校現場での活用法～

毎年多くのご応募を頂いている国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト。今回コラムでは、本コンテストを地理的分野の学習に位置づけて学習を実践された横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校の戸沼 雄介先生（社会科）の具体的な取組例と、2018 年度取組に向けたアドバイスをお伝えします。明日からの開発教育の取組の参考になれば幸いです。

Q. 2017 年度、エッセイコンテストを地理的分野の学習単元計画に位置付けられたと伺いましたが、はじめに取組の概要をお伺いしてもよろしいでしょうか。

2017 年度の JICA エッセイコンテストのテーマは、「世界の人々と共に生きるために—私たちの考えること、できること—」でした。このテーマは、平成 29 年 6 月に文部科学省が示した新しい学習指導要領の「世界の諸地域学習における地球的課題の視点の導入」（持続可能な開発目標〔SDDGs〕）などに示された課題のうちから、生徒が地理的な事象として捉えやすい地球環境問題や資源・エネルギー問題、人口・食料問題、居住・都市問題などに関わる課題を取り上げること）に合致します。また、このような課題について考えることは、新しい学習指導要領に示されている「育成を目指す資質・能力」の一つである「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」に深く関わり、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」という力の育成にも有効です。以上のことから、本校では、以下図 1 で示したように、このエッセイコンテストを社会科の 1 学年 地理的分野の学習単元計画に位置づけて、取組をすすめてきました。

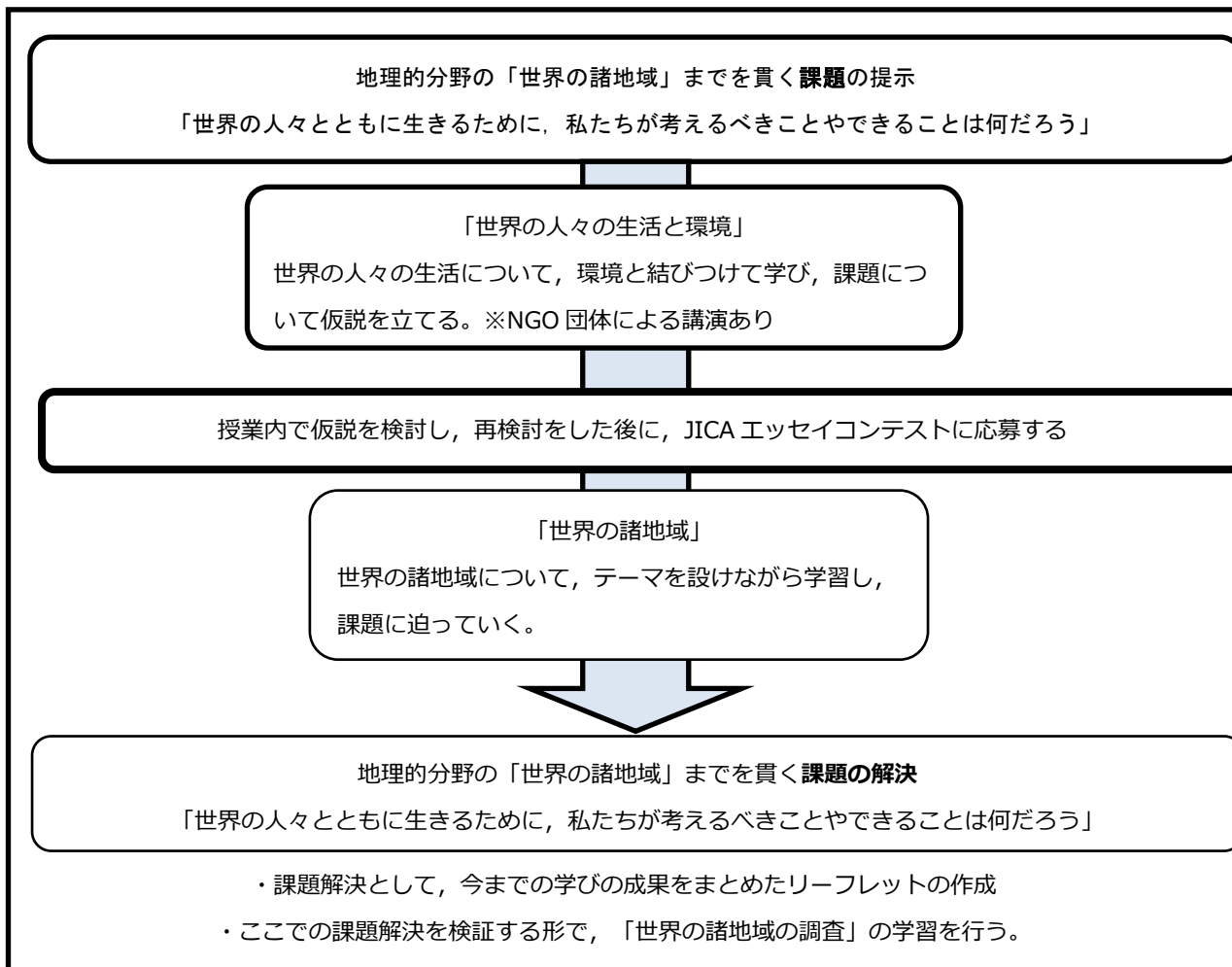
Q. 学習単元計画に位置付けるまでの経緯について教えて頂けないでしょうか。

私は、2012 年に「教師海外研修」でタンザニアに派遣され、国際協力の現場を直に見て学ぶことができました。その感動を授業の形にして子どもに伝えたいと考え、主に総合的な学習の時間で取り組む全 12 時間の単元を作成しました。子どもたちは活動に熱心に取り組み、良い活動となりましたが、それを次年度以降も継続していくということはできませんでした。なぜなら、「どの教科に位置づけ、どのようなねらいを持ち取り組み、どのような力を育成するのか」「それが学習指導要領の目的と一致しているのか」という検討が十分にできていなかったからです。このような経験から、さまざまな活動の「ねらい」や「育成したい資質・能力」を指導者が明確にしておくことがとても大切であるということを感じています。「ねらい」や「育成したい資質・能力」を明確にすることで、活動の意義も増しますし、何よりその取組を日常化することができ、「活動」を本当の意味での子どもたちの「学び」とすることが出来るからです。

このエッセイコンテストについても同様です。この活動を「持続可能」な形で取り組むにはどうすればよいのだろうかと考え、今回は、社会科の地理的分野の学習の「問い」として設定しました。1 学年の

地理的分野では、世界地理を中心に学習します。地理的分野の学習の1つのねらいとして、「地域の諸事情を、地域の環境や人間の営みと関連付けて考察し、地域的特色や地域の課題を捉える」ということがあったので、エッセイコンテストの課題を考えることは、このねらいに迫る手段として有効だと考えました。

図 本校1学年 地理的分野の学習の流れ



Q. 今回、エッセイコンを授業で活用されて感じた生徒の変容や学習の効果について教えていただけないでしょうか。

問いを考えることで、子どもたちは「地域」に関する関心を高めて追究していったと思います。最初は大きな問いに「なんとなく」でしか意見を出せなかった生徒が、さまざまな方の考えや実際の実践に触れる（本校ではNGO 団体の方の話を2回聞きましたが、JICAに依頼をして協力隊OBを派遣していただく形でもよいと思います）ことで、意見が深化したり、過去の自分自身の経験とテーマを結び付けて考えるようになっていく姿が見られ、世界のさまざまな地域に関する興味・関心を高めることができたと思います。

本校の社会科では「主体的に動き出そうとする子ども」の育成を研究の重点としています。18歳選挙権の導入もあり、近年、自分自身の考えをきちんと相手に伝えたり、実際に動こうとしてみる生徒の力

を育成することが中学校にも求められていると思います。エッセイコンテストで問われた「問題」を探るべく、子どもたちが自ら研修に申し込んだり、作文執筆後も世界のさまざまな問題に焦点をあてて追究する生徒もおり（JICA 横浜 Asante! の活動）、学びが広がっていったことが非常に嬉しかったです。

学習の効果としては、以下の3点が挙げられるのではないかと思います。

① 子どもたちが「意欲的に」課題について考える

この実践には、「エッセイコンテストへ参加する」という明確な中間目標があったため、課題について話し合う場面では、言わば子どもたちは「一緒にエッセイコンテストで意見を発表する」同志となって、積極的に意見交換をしている姿が目立ちました。

「なぜ、そう考えたのですか?」「こういう考え方もあるのでは?」子どもたちは意見交換を通して学びを深め、課題解決に向かっていくことができました。

② 子どもたちが「自主的に」動く

エッセイコンテスト応募を控えた8月。夏休み中に JICA 横浜で、中学生も参加できる「ひらめき! ぼくらが考える途上国の未来」というイベントが開催されました。このワークショップを紹介したところ、興味をもつ子どもが多く参加し、その学びを活かしたエッセイ作品を完成しました。課題をしっかりと捉え、その解決のために「自主的に」動こうとする生徒の姿が見られたことは、担当者としても非常に嬉しかったです。



←生徒が参加した JICA 横浜での
ワークショップの様子

③ 「学びの成果」を結びつける

意欲の高まった子どもたちは、さまざまな場面で「学んだこと」を結びつけて考えるようになっていきました。例えば、「世界の諸地域」のヨーロッパ州の学習で、移民・難民問題を取り上げたとき、「紛争を止めさせることはできるのか」という疑問を子どもが出し、教室が白熱した際には、以下のような子どもたち同士のやりとりがありました。

「政治が安定しないと、支援をしてもうまくいかない。介入しても紛争は止めさせるべきだ。」
「世界の状況を見ると、紛争はいつでも起こっている。結果として、介入はうまくできていない。」
「その地域に住んでいる人が、変わりたいと思えば、必ず変わるはずだ。」
「でも、変わりたいと思う気持ちを起こさせるために、私たちが何をできるのか、が問題だ。」
「今“世界の人と共に生きるために”という大きなテーマで考えているけれど、やはりあってはい

けない違いが世界にはある。それを乗り越えていくために、何ができるのだろう。」

「やはり、まずは世界の状況をしっかりと知り、伝えていくことかな…。」

「道徳の授業で知ったフェアトレードは？商品を買うことで、継続的に関わることができる。」

紛争から始まった話が、世界の格差の話に、そして「できること」の話へと変化していく、様々な学びから感じたことを子どもたちは心に留め、それを結びつけて考えを深めている—単元を貫く課題を JICA エッセイコンテストから設定したことで、子どもの学びが深まったように思います。

Q. 最後に、2018 年度エッセイコンテストに取組まれる先生方へのアドバイスをお願いします！

来たる平成 30 年度から、中学校では新しい学習指導要領の移行措置期間が始まります。ご存知のように、新しい学習指導要領では、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」が「育成を目指す資質・能力」の一つとして記されました。また、社会科では、「世界の諸地域学習における地球的課題の視点の導入」（持続可能な開発目標〔SDGs〕）などに示された課題のうちから、生徒が地理的な事象として捉えやすい地球環境問題や資源・エネルギー問題、人口・食料問題、居住・都市問題などに関わる課題を取り上げることが求められています。このエッセイコンテストを有効に活用することで、それらの目標を達成する一助となる可能性があると思います。

また、本校では、毎年研究発表会を行っています。平成 30 年度は 10 月 12 日（金）・13 日（土）に開催予定です。よろしければ、御来校いただき、実際の授業に関してさまざまな先生方からの御助言をいただけますと有り難いです。

いかがだったでしょうか。2018 年度の募集情報については、5 月中旬に公開予定です。本年度も、皆さまに本コンテストを学習の一環として位置付けて頂き、意欲的で主体的な学びにご活用いただければと思います。